



明治学院大学機関リポジトリ
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	ムスリムによる反テロ思想と英国における教育実践 ターヒル・カードリーのファトワー（法的判断）に 基づいて
Author(s)	大川, 玲子
Citation	明治学院大学国際学研究 = Meiji Gakuin review International & regional studies, 50: 163-180
Issue Date	2017-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10723/3010
Rights	

【研究メモ】特集テーマ「マイノリティの視点から」

ムスリムによる反テロ思想と英国における教育実践

——ターヒル・カードリーのファトワー（法的判断）に基づいて——

大 川 玲 子

はじめに

現在の世界においては、異文化間の平和共存が極めて喫緊の課題となっている。世界中至るところで文化の相違が大きな要因だと考えられるテロが頻発し、一般市民の生命さえ脅かされ、犠牲となっている。具体的にはイスラーム系テロ組織のアル＝カーイダや、昨今は特にIS (ISIL, ISIS, 「イスラム国」、ダーイシュとも呼ばれるが、ここではISとする)が、残忍極まりないテロ行為をイスラームの名の下に実行している。彼らの攻撃対象は、ムスリムでない人々やスンナ派でないシーア派の人々であり、自分たちと価値観、つまり文化が異なる者を暴力的に排除することを是としているのである。

国際社会はこのような組織活動を根絶するために模索し、行動しているが、その実現は容易なことではない。これまでアル＝カーイダやISなどのテロ組織に対して、欧米諸国を中心に国際社会が対策を練り、過激派の監視・摘発や空爆といった軍事行為も含む対応をとってきた。こうすることで組織的・軍事的にはある程度、弱体化させることに成功してきたと言えるかもしれない。

だが実際のところ、1つの組織が弱体化しても、また別の組織が生まれ、そこに新たに若者ムスリムが加わることになり、この悪循環を断ち切ることは、短期間でできることではない。若者のムスリムのなかでこれらの組織に魅かれ、加わる者たちが後を絶たないことは、ムスリム諸国のみならず非ムスリム社会の欧米でも見られる現象であ

り、社会的問題となってきた（国末 2005；別府・小山 2015；三井 2016）。

本稿ではこの欧米のなかで特にイギリスに焦点をあてるが、この国のムスリムの多くは南アジアに出自をもつマイノリティである。テロ組織に入るような若者ムスリムたちは、自分が属す社会に不満や疎外感を持ち、自分がその国の国民・市民であるのか、ムスリムであるのか、もしくはそれ以外の何かなのかと迷い、アイデンティティは不安定になりがちである。それゆえ、ゆるぎないアイデンティティを得るために、明確な敵や分かりやすい目標を提示し、結果がすぐに出やすい暴力行為を繰り返すイスラーム系テロ組織に魅かれ、そのなかの一員として自己を確立させられるのではないかと期待してしまうのであろう。このような若者の悩みを根絶することなく、国際的テロ組織の撲滅はあり得ないと考えられるが、それは容易なことではない。

このように国際社会は苦しい道りにあるが、そのなかで解決への糸口の1つとして、ムスリム共同体内部でテロを生む土壌をなくそうとする動きが生まれていることは注目すべきものである。テロ組織に魅かれるムスリムの若者たちが非ムスリムの言葉に耳を傾ける可能性は低い。むしろムスリムのなかで説得力をもった人物が語りかけることによってイスラームの理解をあらためる可能性の方が高いと言えるであろう。

またこのようなムスリムの動きは、彼ら自身の責任であるとも言える。山内昌之は2015年11月のパリでの同時多発テロを受けてアズハル宗務庁がヨーロッパに代表団を派遣し、対話開始を表明

したことを評価した上で、このような努力は彼らの責任であると指摘している。「イスラーム文明からISのような集団が生じた遺憾な事実を批判し、内部から克服する努力は良質なイスラーム社会の担うべき責任だからだ。内発的動きが世界中のあちこちから出てこない限り、究極的な問題解決は難しいのである」(山内 2016: 92)。

このような背景のなか、本稿は、ムスリム内部から生まれた対テロの一方策として、ターヒル・カードリー (Tahir-ul-Qadri) という宗教思想家・活動家を取りあげ、その主張や活動の意味を考えていきたい。カードリーはパキスタン出身で、寛容を説くとされるスーフイズム (イスラーム神秘主義。タサウウフとも言う) の影響下で、イスラーム復興を主張する思想家である。パキスタンでは広く知られ、その顔をテレビの宗教チャンネルで見ない日はないとまで言われるほどである (Ahmad 2010: 9)。かつ、世界各地に広まる NGO のミンハジュ・ウル＝クルアーン (MUQ) ⁽¹⁾ の創設者でもあり、国際的知名度も高い⁽²⁾。

本稿がカードリーに注目する理由は、彼がテロを批判するウルドゥー語のファトワー (法的判断) をパキスタンで出し、それが英語に訳され、大きな反響を起こしたためである。そしてこのファトワーに基づき、パキスタン系ムスリムが多く居住する英国で、反テロ・カリキュラムを実施している。アレクサンドル・カエイロ Alexandre Caeiro も指摘するように (Caeiro 2011: 121)、国家や社会の主流と切り離されがちなヨーロッパ在住のムスリムたちにとって、ムスリム法学者が発するイスラーム法に基づいたファトワーこそがムスリムとして生きていくための唯一の規範となっている。このような社会背景のなかで、カードリーの出したメッセージが持つ意味は大きいと考えられるのである。

カードリーに関する先行研究としては、ムハンマド・ハビブ Muhammad Habib の『イスラーム復興主義：必要性と挑戦：ムハンマド・ターヒル・カードリー博士のイデオロギーに関する批判的分析 *Islamic Revivalism: Necessity & Challenge: A Critical Analysis of Dr Muhammad Tahir-ul-Qadri's*

Ideology』 (Habib 2014) が最もまとまったものであろう。ここでは、カードリーのクルアーンに基づいたイスラーム復興主義思想が分析され、第6章で本稿が扱うファトワーについて法学思想の再構築、特にイジュティハードという観点から論じている。イジュティハードとは、クルアーン (コーラン) やハディース (預言者ムハンマドの言行伝承) の解釈における革新性・刷新性を言う。この研究は、ハビブ自身が MUQ のメンバー (Habib 2014: 11) であることから、内部からの批判的分析という特徴ももつ。他にも Ahmad (2010) がカードリーをパキスタンのメディアで活躍する人気宗教者の1人として論じ、Philippon (2013) がパキスタンでの MUQ の活動について検討している。またパキスタン国外での MUQ の活動に関して、Morgahi (2011) と Morgahi (2013) がそれぞれオランダとイギリスについて分析している。このようにカードリーの祖国パキスタンでの活動とヨーロッパでの活動が注目されている。

これらに対し、筆者はカードリーの思想や活動をムスリム・マジョリティ国のパキスタンからムスリム・マイノリティ国のイギリスに移動したことに着目し、そのダイナミズムを分析していきたいと考える。そうすることで、現代のグローバル社会におけるムスリム思想家・活動家の1つの特質を明らかにできるであろう。本研究メモはこの研究の第一段階となり、次のような目的をもつ。ターヒル・カードリーや MUQ の存在は日本ではほとんど知られておらず⁽³⁾、まずはその紹介を兼ねての概観を提供したい。そのなかで、カードリーを論じることで、テロ、イスラーム主義、スーフイズム、移民、マイノリティ、教育、といった多くの重要な現代的な問題に関して考察することができることを指摘したい。具体的にはカードリーのファトワー書の内容と教育の場でのその実践の様相を検討していくことになる。これらをふまえ、テロに関わるムスリムを根絶するという課題が解決される可能性を探ってみたい。カードリーの反テロ思想は、イスラームの伝統的な思想と西洋的学問の双方を学んだムスリム宗教者が、ムスリム国家パキスタンで頻発するテロを念頭に出した

ファトワーである。そしてムスリム・マイノリティ社会であるイギリスでその適応を試みている。つまりローカルからグローバルに発展したと言えるのであるが、果たしてムスリムがマジョリティである国から出たテロ根絶の努力が、ムスリムがマイノリティの国にどれほどの説得力・効果を持ち得るのだろうか。この試みの意義を考えることで、国際社会が望むテロ根絶への道筋の1つを探っていきたい。

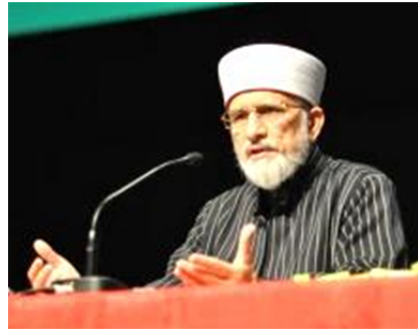
本研究メモの構成は以下の通りである。まず「1. ターヒル・カードリー」では彼の半生を概観し、その学問的・思想的背景を検討する。次いで「2. ファトワー」ではファトワーの現代における意味を論じた後、ターヒル・カードリーのファトワー書の目的や内容を検討する。「3. イギリスのパキスタン系ムスリム」ではパキスタン系移民の歴史的背景と現在のテロに関わる問題を見ていく。そうすることで、ターヒル・カードリーのファトワーが教育カリキュラムとなった意味を考える。そして「4. 反テロ・カリキュラム」では、教育カリキュラム発足の経緯・目的・特徴を検討する。以上をふまえ、最後にターヒル・カードリーのファトワーと教育カリキュラムの意義を考えたい。

1. ターヒル・カードリー

(1) 半生

まずはターヒル・カードリーの半生を概観しておきたい。彼は1951年にパキスタンのジャンJhangのイスラームの学者の家系に生まれた。10歳ごろから、高名な学者で神秘家（スーフィー）であった父より宗教について学んでいたが、12歳の時に、サウディ・アラビアのメディナのマドラサ（イスラーム学校）でイスラーム諸学を学び始めた。イスラーム諸学とは、クルアーン解釈学、ハディース学、イスラーム法学、イスラーム哲学などに関する伝統的なイスラーム学のことである。イスラームの古典文献やアラビア語に関しては父からも学んだという。さらにサウディ・アラビアのメッカやシリア、イラクのバグダード、レバノン、マグリブ諸国、インド、パキスタンをめ

ターヒル・カードリー



<http://www.drtaahirulqadri.com/main/>

ぐり、多くの優れた師より教えを受けた（Tahir-ul-Qadri 2010 : II-III; “Profile” : 5, 15-20⁽⁴⁾）。

また大学教育も受けており、1970年にパキスタンのパンジャブ大学でイスラーム学やアラビア語を学び卒業、1972年にイスラーム学で修士号、1974年に法学士（LLB）を取得した。1978年にパンジャブ大学の法律の講師となり、イスラーム法博士号も取得、その後、教授や学部長を務めた（Tahir-ul-Qadri 2010 : III）。このように前述のイスラーム伝統教育と同時に近代的・西洋的な大学教育も受け、その教育も担っていた。

さらには、法学者として司法の場でも活躍している。連邦シャリーア裁判所の法学アドバイザーかつ最高裁判所の上級シャリーア裁判官、連邦教育省のイスラーム・カリキュラム向上に関するアドバイザーを務めた（Tahir-ul-Qadri 2010 : III）。法学士取得後に数年、ジャンの地方裁判所で弁護士として実務にも従事していたこともある（“Profile” : 6）。これらはパキスタンの司法界での実務・貢献ということになるだろう。後で詳述するようにファトワーとは法学に基づく学者の判断表明であり、イスラーム法学の学識に加え、実務面での業績もあるターヒル・カードリーはムフティー（ファトワーを出す者）の資格があると十分みなされ得るだろう。

1980年代にカードリーは「国の指導的なイスラーム法学者かつイスラーム・イデオロギーの復興主義者として知られるようになった」（“Profile” : 6）という。1981年にミンハジュ・ウル＝クルアー

ン (Minhaj-ul-Quran) をラホールに創設し、その後 30 年ほどでアジアや中東、欧米の 90 以上の国に支部が広まった。さらにミンハジュ大学を設立し、ミンハジュ教育協会によって 572 以上の学校や大学をパキスタンに設立、ミンハジュ福祉基金を通して世界中で人道社会福祉活動を行っている (Tahir-ul-Qadri 2010 : III)。

このなかでイギリスはパキスタン国外での MUQ の重要な拠点だと考えられる。その本部は東ロンドンのフォレスト・ゲートにあり、支部はマンチェスターのオールドハムなどのパキスタン系ムスリム共同体のある多くの都市に広まっている (Hamid 2016 : 74)。本稿で検討するファトワーに基づく教育カリキュラムの実施はイギリス各地で開催され、MUQ 系列の出版社ミンハジュ・クルアーン出版はロンドンにあるなど、重要な活動が展開されている。これはヨーロッパの中でもイギリスにパキスタン系ムスリムが多いことが背景として考えられる⁽⁵⁾。

近年カードリーは基本的にカナダに在住し、講演や集会のために祖国パキスタンやイギリスをはじめ、世界中を訪れているようである。パキスタンでは政府の腐敗を批判する大規模なデモ行進を主催した⁽⁶⁾。またイギリスでは宗教間対話を促進する「人類のための平和」集会を 2011 年に開催して 1 万 2 千人が参加、世界の平和を求める「ロンドン宣言」を表明し、25 万人がインターネット上で署名したという (Tahir-ul-Qadri 2015a, b, c : XI)。このように昨今は特に、平和推進や宗教間対話はその活動の中心に置かれている。

カードリーの著作は、本稿で取り上げるファトワー書に加え数多く刊行され、430 点にもものぼるという (“Profile” : 7-14)。そのテーマは伝統的イスラーム学と現代事情に関するものに二分される。前者に属するのは、クルアーン解釈書、やハディースに関する論考、神学 (アキード)、ムハンマドの伝記 (シーラ)、法学 (フィクフ)、神秘主義 (スーフィズム、アラビア語でタサウウフ) といったものであり、伝統的なイスラームの学問を網羅している。これに対して、イスラーム的政治経済システムや人権、科学に関する著作も少なく

なく、現代的諸問題への関心と発信の意欲を示している。

以上より、ターヒル・カードリーの受けた教育や行動様式は、伝統 (イスラーム) に根差しつつ、近代 (西洋) 的に展開してきたことがうかがえる。さらに伝統の領域でも、法学と神秘主義というイスラームの知的伝統のなかで相対する二本柱に立脚している。このように彼は知性においても行動においてもバランスの良さが特徴としてあり、よって多様な文化や価値の共存を必須とするグローバル社会のなかでイスラームを適応させるのにふさわしい学者だと言えるであろう。西洋社会に育った移民の若者たちの目から見れば、イスラーム学者として伝統的知の体系を極めた上に、西洋的学問も習得し、国際的に評価されるカードリーの言葉つまり思想は、説得力を持ち得ると考えられるのである。

(2) 思想的背景

ターヒル・カードリーの思想の特徴は、いわゆるイスラーム主義に対抗したものだという点にある。イスラーム主義とは、「イスラーム原理主義」とも呼ばれることがあるように、イスラームの原点、預言者ムハンマドの時代を理想とし、その頃の社会への回帰とその現代への再現を目指す政治運動である。本稿執筆の時点では、IS (イスラーム国) が最も問題として注目されるイスラーム主義運動である。彼らはイスラーム法 (シャリーア) に基づくイスラーム国家の設立を目指し、クルアーンを字句通りに (実際には異教徒など弱者に対してより過酷に) 解釈して現実社会に適応しようと試みている。パキスタンのスーフイーの家に生まれたターヒル・カードリーは、イスラームを深く学んだが、教条主義的なクルアーンの解釈とは縁遠い立場をとる。ここでは彼の思想的背景として、スーフィズム (神秘主義) とパキスタンの国情という思想潮流の二点に着目して論じていく。

スーフィズムとは、汎神論的な世界観に基づき、修行を通して人と神との合一を目指し、教団を作り、聖者への崇拜を行うイスラームの大きな思想

的潮流である。宗教の形式よりも内面・精神のあり方を重視する。特に12世紀以降、民衆の間にも広まったが、近代になると否定的にとらえられるようになり、その勢いは別の新しく生じた思想潮流にとって代わられた。その思想潮流の1つが近代化・西洋化を目指すもので、スーフィズムをイスラームの後進性の原因とみなして、イスラームの革新や聖俗分離を唱える世俗化（トルコ共和国などで実行された）である。もう1つが、ムハンマドの時代にはスーフィズムはなかったという理由で、スーフィズムを逸脱（ビドア）とみなすイスラーム主義である。

パキスタンはインドの英国からの独立の際、ムスリムを国民とする国家として分離建国された人工国家であり、国家としてイスラーム主義的傾向を示しがちであることに対して民衆にはスーフィズムが浸透している。近年のパキスタンでは、民衆の間で広まっているスーフィズムの聖者廟での祭礼（ウルス）を認めない厳格なイスラームを追求するデーオバンド派とそこから派生したとされるターリバーンが大きな問題となっている。周知のようにアル＝カーイダがアメリカ同時多発テロ（9/11）を実行した当時、協力関係にあったのがアフガニスタンのターリバーンであった。

パキスタン政府は1994年以降ターリバーンを支援し、その育ての親とまで言われる深い関係にあった。しかし9/11以後、態度を一転させ、アル＝カーイダやターリバーンに対する攻撃の西洋諸国、特にアメリカの拠点になったという矛盾をはらむ。このような背景のなかパキスタンはテロが多発し、政府組織に加えてスーフィズムの聖者廟やシーア派施設へのパキスタン・ターリバーン運動の自爆テロが頻繁に生じている。さらにこの自爆テロ実行犯は若者であり、この点も大きな社会的問題となっている（井上2003；坂口編2010；水谷2011；中野2014など参照のこと）。

対してターヒル・カードリーはデーオバンド派ではなく、ウルスや聖者による奇蹟などを認めるパーレルヴィー派に属し、スーフィズムの伝統に深く根差す宗教指導者である。彼はカーディリーヤと呼ばれるスーフィー教団に属し、自身が創設

したMUQのラホール本部では実際に、スーフィーたちが行う儀礼（サマーウと呼ばれる^{しょうみょう}声明のようなものなど）が行われる（Philippon 2013 : 112-113）。ただしハビブによれば、ターヒル・カードリーは特にパーレルヴィー派やデーオバンド派といった相違には関心はないという（Habib 2014 : 24）。これも彼が寛容や異なる信仰との対話を重視する思想を主張していることに基づくのであろう。またアリックス・フィリップン Alix Philippon が指摘するようにカードリーは、一般のパーレルヴィー派思想家がタクリード（先人の学者たちの見解に盲従すること）を重んじるのに対し、イジュティハード（それぞれの時代状況に応じて新しい見解を出すこと）を重視しており、パーレルヴィーの伝統を墨守しているわけでもないことがうかがえる（Philippon 2013 : 114）。この姿勢ゆえに、彼は現状の問題をふまえたファトワーを出すに至ったとも言えよう。

カードリーはその思想背景にスーフィズムを有するだけではなく、それをイスラーム社会に必要なものとして積極的にとらえている（Habib 2014 : 328-336）。「スーフィーの教えはその指導者〔筆者注：カードリー〕にとって、『ワッハーブ主義』という名の下に含められているテロリズムに首尾よく終止符を打つための唯一の武器のようにとらえられている」（Philippon 2013 : 114）とフィリップンも述べている。このようにカードリーは、「ワッハーブ主義」つまり「サラフィー主義」とも呼ばれる武装過激イスラーム主義のテロリズムに立ち向かうためにスーフィズムを用いているのである。1990年代以降、イギリスのパーレルヴィー系のスーフィズム思想家たちはイスラーム主義を「ワッハーブ主義」や「サラフィー主義」と呼び、対抗するために自らの組織化や改革を進めてきたのであり（Geaves and Gabriel eds. 2013 : 4-5）、カードリーもこの流れに属している。

このようにカードリーはスーフィズム思想に基づき、イスラームは寛容、平和、愛を主張するととらえ、反テロ・平和思想を構築している。これはトルコ出身でアメリカに移住し、世界的にヒズメット運動というNGOを展開するフェトフツ

ラー・ギュレン⁽⁷⁾の思想に通じるものである(大川 2013: 155-184; 大川 2014)。両者の思想と社会運動には構造的に類似する点が多く、今後の比較検討が必要と考えられる。いずれにせよ、テロという暴力が自分たちと異質な信仰をもつ者たちを攻撃するためにムスリムによって頻繁に用いられる現代社会において、ターヒル・カードリーはスーフイズムというイスラームの伝統に根ざしつつ平和思想を生み出し、世界的に影響をもつ重要なムスリム思想家・指導者の一人と言える。

2. ファトワー

(1) ファトワーとは

ファトワーとはムスリムの日常生活に欠かせない、イスラーム法に基づいたアドバイスのようなものである。日本語では「法的判断」「法的意見」などと訳される(小杉 1987; 大川 2007; 嶺崎 2015 など参照)。ムスリムが結婚や離婚、遺産相続といった日々の問題に直面した時、ウラマー(ムスリム宗教学者)に質問し、これへの回答としてファトワーが出される。ただし法的な拘束力はなく、学者によって回答が異なることも多い。ファトワーを出す法学者はムフティと呼ばれるが、支持者の多い者のファトワーは大きな社会的影響力を持つ。さらに昨今の特徴として挙げられるのは、インターネットの浸透にともない、サイバー・ファトワー(オンライン・ファトワー)が特にムスリムの若者の間で広まっていることである。その相談内容もまた、日常生活の悩みから、テロや自爆攻撃の是非、さらには攻撃の命令に関してまでと(Weimann 2011)、現実世界の諸問題を反映している。ファトワーはムスリムの生活のあらゆる側面に関与し、行動の指針とされる。

ファトワーは国際問題とも深く関わって来た。最も古く国際的に注目されたファトワーは、ホメイニーが1989年に出したものではないだろうか。このファトワーは英国在住でインドのムスリム家庭に生まれた作家サルマン・ラシュディへの死刑宣告であった⁽⁸⁾。よってイスラームの他の価値観に対する非寛容性や好戦性を示す事例として理解

されてきた。

だがターヒル・カードリーのファトワーは、自爆攻撃やテロをムスリムの行為として否定するために発出された。このテーマに関するファトワーは9/11以降数多く発されており、ジョン・エスポズィート John L. Esposito は9/11以降のテロ問題に対するファトワーの展開をふまえ、カードリーのファトワーを評価している。エスポズィートによれば、これまでもテロを批判するファトワーがムスリム知識人によって出されてきたが、報道はテロリスト側の声明のみを扱ってきた。例えば9/11の翌日には、ムスリム世界全体に影響を持つ宗教学者ユースフ・カラダーウィーがクルアーンの句を引用しつつ、テロを批判するファトワーを出している。しかしカラダーウィーや他の宗教指導者たちは、イスラエルと闘うパレスチナ人やアメリカと闘うイラクのムスリムたちに対しては、自爆テロを行うことが合法であると考えている。また自爆テロによって無辜の市民や非戦闘員が巻き込まれることに関しては議論が分かれており、イスラエル人は非戦闘員であっても敵であるとみなす場合も見られる。しかしターヒル・カードリーのファトワーはクルアーンや高名なムスリム学者たちが述べていることを広く網羅した上で、全ての暴力的テロ行為を否定するものである。このようにエスポズィートはカードリーのファトワーを高く評価している(Tahir-ul-Qadri 2010: XXIV-XXVIII)。

(2) カードリーのファトワー書

9/11以降の自爆テロ攻撃の連鎖をおしとどめるための一方策として、ターヒル・カードリーのファトワーは存在意義を持つと考えられる。そのファトワー書『テロリズムと自爆攻撃に関するファトワー *Fatwa on Terrorism and Suicide Bombings*』は2010年3月にウルドゥー語で、同年12月に英語で刊行された。

このファトワーが出された際、イギリス社会でも好意的に受け取られ、BBCでは次のように報じられた。このファトワー書はアル=カーイダの暴力的イデオロギーを解体するものであり、カード

リーの活動はイギリスの政策立案者や治安関係者から関心を寄せられている。カードリーはアル＝カーイダのメンバーが若者を組織に勧誘する際に用いる議論を論破する根拠を提示している。MUQはイギリスでも最近まであまり知られていなかったが、現在、伝統的な指導者に幻滅した若者たちを主な対象として活動中である。政策立案者や治安関係者はテロ対策のために穏健イスラーム組織との連携をはかっているが、草の根への影響力をもつ組織がなかなか見つからないのが実情である⁽⁹⁾。この記事では、カードリーのファトワーや MUQ の活動が英国社会や英国政府側と連携する可能性をもっていることが示唆されており、期待のほどがうかがえる。

このファトワー書は500頁にもわたる大部なものであり、書評を著したマティアス・グイドグリ Mattias Guidugli も言うように今後の詳細な分析検討が必要とされる (Guidugli 2013 : 160)。すでにふれたがハビブによる、法学思想上の解釈のイジュティハードとしてこのファトワーをとらえる視点も重要なものであるが (Habib 2014 : 276-313)、このファトワーはそれにはとどまらない価値があり、さらなる多角的分析を要するであろう。ただし本稿ではその概要の紹介と特徴の指摘を行い、詳しい分析研究は今後の課題としたい。

カードリーの執筆の意図については、ファトワー書冒頭で語られている。少数のムスリムたちがテロをジハードの名のもとにイスラームと結び付けようとしているため、「実際のところ世界中の現代の若者ムスリたちは、実践的分野や信仰、宗教的教義の領域で、知的混乱と崩壊の被害者となってしまうている」(Tahir-ul-Qadri 2010 : 3-4) とし、次のように述べている。

このようなひどい状況を鑑み、私は西洋世界とイスラーム世界にイスラームのテロリズムに関するスタンスを説明する必要があると考えた。それはクルアーン、預言者の伝承(ハディース)、そして法学や神学といった古典文献に基づく。その目的は、この見識を世界中の重要な研究機関やシンクタンク、影響力のある世論を形成する組織に伝え、イスラーム

について疑念や不安を抱く者がムスリムであっても非ムスリムであっても、テロリズムに関するイスラームのスタンスをより正確に理解できるようにすることである (Tahir-ul-Qadri 2010 : 5)。

続いて7つの質問(表1)と各々に対する回答が示される (Tahir-ul-Qadri 2010 : 7-12)。実はこの個所に最もファトワーらしさを見て取ることができる。前述したようにファトワーとは個々のムスリムが法学者に質問を發し、それに対して返される回答であるからである。だが本書は、この個所での簡潔な回答以降に展開される論述全体が、7つの質問への詳細なかつ壮大な回答になっていると言える。

ここから現代のムスリムたちが、テロに対して何を悩み、疑問に思っているのかがうかがえる。質問5の「ハワーリジュ派」に関するものはイスラームの歴史に根差す議論となっているが、それ以外の質問は、武力でもって問題を解決することへの懐疑に通じており、非ムスリムの視点からも共有できる問題提起であろう。

カードリーはこれらの質問に回答し、良い意図は悪を善に変えないという結論を出し、それについて論じている (Tahir-ul-Qadri 2010 : 13-17)。彼の現状認識によれば、多くの人は自爆攻撃は悪だと考えるが、それでもそれが良い意図によるならば正当化されると思い、ジハードだと認められ非難されない。これに対してカードリーはクルアーン第2章204-206節を引用する。ここではアッラーのためという口当たりの良い言葉で人を惑わすが、実際には悪事をはたらく者が諫められ、地獄に落ちるとされている。カードリーはこのような人々を現代のテロリストだと考えているのである。そしてたとえ良い意図に基づくためジハードなのだと主張しても、イスラーム法上、テロという暴力行為は認められず、テロリストは地獄へ落ちるのだと明言している。

イスラームを守り、それを外国の攻撃から防衛し、ムスリムのウンマ(共同体)に対する不正や非道に報いることと、平和的な市民を残酷に大量殺害し、

表1 7つの質問

質問1	自分の信仰を他者に広めるために暴力を用いてよいか？イスラームは教義上の相違を理由に人を殺すことを認めているのか？人の財や所有物を奪ったり、モスクや宗教施設を壊したりすることについてはどうなのか？
質問2	ムスリム国における非ムスリム市民の権利はどうなるのか？
質問3	イスラームは人間の生命の尊厳に関してははっきりと命じているか？不正に復讐したり、非ムスリムの世界的権力を混乱させるために、外国の使節団や平和的な非ムスリム市民を誘拐したり暗殺したりすることは認められるのか？
質問4	非イスラーム的政策の政府を倒し、または改めさせるために武装闘争を行ってよいか？合法的な政府やその権威への反乱はイスラーム的に命じられているのか？為政者のやり方を改めさせるための合法的な方法は何か？
質問5	ハワーリジュ派はテロリズムの歴史に大きな足跡を残している。ハワーリジュ派とは誰か？イスラームの啓示法でどう判断されるのか？現在のテロリストはかつての派のハワーリジュ派の系譜に属すのか？
質問6	テロリストの活動や武装をやめさせるために政府はどのような手段をとるべきか？
質問7	テロリストの残虐行為は、もし彼らの意図がイスラームを広め、ムスリムの権利を守るためであるならば、正当化され許されるのか？

所有物を破壊し、残虐に人を殺害することは全く異なるものである。前者によって後者が合法となることは決してない。この両者は全くの無関係である。テロリズム、大量殺戮、そして大虐殺がイスラーム的命令を実行するという名目で正当化されることはあり得なく、それらが例外的に認められることはない。

ここでは、「イスラームのため」と信じて暴力的ジハード行動に走っているテロリストの「良い意図」を根底から否定することで、強くテロ行為が批判されている。これは良い意図があれば自爆テロもジハードとして認められるのではないかというテロリズムに親和性をもつ認識を真っ向から否定するものである。そのために用いられている論理的根拠としてクルアーンの啓示が示されている。テロ組織に魅かれる者たちには、クルアーンに基づいた議論でもって、その誤ったイスラーム理解を正す必要があるという、カードリーの考えがうかがえる。しかしファトワー本来の姿である問答形式だけでは、深く誤った暴力肯定者のイスラーム理解を正すには不十分だと考えたのである

う。前述したように、このファトワー本の全体こそが、これら7つの質問への極めて詳細な回答と言えるものになっているのである。

このファトワー本の趣旨は、そもそもイスラームは平和の宗教だと定義した上で、現代のテロリストをイスラーム誕生時から存在した反イスラーム的集団の「ハワーリジュ派」と同一視することで、批判・否定するというものである。カードリーはクルアーンやハディース、古典期や現代の法学者や神学者の著作などを網羅的に参照しながら、詳細な議論を展開している。

第1章「イスラームの意味」では「イスラーム」の語義を議論し、次のようにまとめている。

本来、イスラームという言葉の語彙的・言語的意味は、平和、安心、保護、安全、そして庇護というものである。つまり、イスラームとは暴力や殺害からの安全を含意し、保護や安心を意味する。イスラームには、紛争や大量虐殺、破壊、無政府状態、混乱を認める余地はないのである (Tahir-ul-Qadri 2010 : 31)。

第2章から第12章では、イスラームの教えにおいてムスリムであれ非ムスリムであれ、その生命や信仰が守られていることが論じられる。第2章「無差別にムスリムを殺すことの違法性」では、ムスリム同士の殺戮を禁止している。またここでは自らを殺すこと、つまり自爆テロも禁止されており、広く世界で行われている自爆行為そのものが反イスラームであることを論証している。第3章「無差別に非ムスリムを殺し、拷問することの違法性」では、殺害の対象を非ムスリムとし、これもまたイスラームの教義上禁止されていることを論証する。さらには非ムスリムを攻撃から保護することもムスリムの義務だと述べている。第4章「非ムスリムへのテロは戦争時であっても違法である」では、女性や子ども、宗教指導者といった非戦闘員への殺害行動が認められないことを指摘する。第5章「非ムスリムの生命、所有物、神聖な場所を保護すること」では、非ムスリムの保護がムハンマドの時代から続けられてきたことを論じている。第6章「異なる信仰を強制し、神聖な場所を破壊することは違法である」では、信仰の自由を説き、異教徒の礼拝施設に対する破壊行動を批判している。第7章「イスラーム国家での非ムスリム市民の基本的権利に関する法的格言」では、ムスリム・マジョリティ国において、非ムスリムの基本的権利が守られると説く。

第8章から第12章においては、「反乱」という概念に焦点を当てて議論が進められている。政府への反乱としてのテロがテーマとなっているのは、腐敗した政府に対するテロが頻発するパキスタン国内の状況をふまえたためと考えられる。第8章「ムスリム国家、行政、権威に対する反乱は違法である」では、「反乱」のイスラーム法上の定義について論じ、第9章「反乱：その重さと罰」では、反乱が重罪である理由を預言者ムハンマドの言動から説く。さらに第10章「腐敗した政府への闘いの法的地位」は、ムスリム政府に対する武力による反乱は違法であり、合法的な手段で政府を変える必要があるとする。第11章「ウンマ[イスラーム共同体]の4人のイマームと偉大な権威者たちによるテロリストと反乱に反対する法的な

判断と言説」では、さらに、イスラームの4大法学派の創始者など古典期の著名な法学者たちがテロや反乱に関して述べていることを紹介している。そして第12章「現在のサラフィー系学者の反テロリスト言説」では、サウディ・アラビアの著名な法学者で大ムフティであったイブン・バーズ（1999年没）など、サラフィー（イスラーム主義）系の厳格なイスラームを追及する学者たちによる反テロ行為の主張を紹介している。例えばテロリストはハワーリジュ派である、テロリスト活動はジハードではない、といったイスラームの議論に立脚したテロリスト批判が展開される。

次いで第13章から第17章では、現在のテロリストがイスラーム初期から存在した「ハワーリジュ派」であること、そしてその存在はイスラームの教えから完全に逸脱したものであることが詳細に論証される。カードリーは、現代のテロリストは反乱者で、ムハンマドの時代から存在した類の人々であり、ムハンマドによっても批判されているととらえている。

「ハワーリジュ」とはアラビア語で「退出した者」を意味し、この名称はイスラーム初期の出来事に由来する。第4代正統カリフで、後にシーア派の初代イマームとして尊敬されるようになった、ムハンマドの従兄弟アリーと、その敵であったウマイヤ家のムアーウィアの間、カリフ位をめぐる対立が生じた。アリーは妥協しようとしたが、これに反対した一部のアリー支持者が「退去・離脱」し、アリーにはカリフの資格はなしとして、暗殺したのであった。この人々がハワーリジュ派であるが、その後、必要以上に厳格で狭いイスラーム理解をもち、暴力で問題を解決しようとする組織に対するレッテルとしての名称になった。

カードリーのファトワー本の第13章「ハワーリジュ派の厄災と今日のテロリズム」ではこの派の定義や特徴、ムハンマドの時代やイスラーム初期の状況について論じられている。第14章「ハワーリジュ・テロリストに関する預言者の言葉」では、ムハンマドやその同世代の人々によるハワーリジュ派的テロリストへの非難の言葉、例えば「彼らは最悪の被造物である」といった言説が紹介さ

れる。第15章「ハワーリジュ派による騒乱は排除されるべきという預言者の命令」では、ハワーリジュ派と闘い排除することがムスリムの義務だと論じられている。第16章「ハワーリジュ派を不信仰とし、その排除を命じたイマームたちの言及」では、現在に至るまで重要視されている歴史書やタフスィール（クルアーン解釈書）を残したイブン・ジャリール・アッ=タバリー（923年没）やイスラーム神学をスーフィズムと融合させつつ集大成したアブー・ハーミド・アル=ガザリー（1111年没）などの古典期の著名な学者たちの議論を紹介している。そして第17章「今日のテロリストはハワーリジュ派である」では、以上をふまえ、現在のテロリストがハワーリジュ派の系譜に属す者だということが論証される。

このなかでカードリーは、ハワーリジュ派は敬虔なムスリムの姿で現れ、若者を勧誘するが、実際には政府に対する反乱者であり、ムスリムはこれと闘うべきだと主張している。カードリーがこのファトワーを出した際にはアル=カーイダやターリバーンが念頭に置かれていたと考えられ、ここではパキスタン国内での反政府テロ活動の批判が意図されているのであろう。しかし、若者を勧誘するテロ組織の実態は、ISが跋扈する現在も同じ構造で続いており、カードリーの反テロ思想は今なお説得力をもっている。

最終章である第18章「社会的・政治的闘争の平和的な方法」では、不正や抑圧に対して、平和的な手段で政治的・民主主義的に闘うべきだと述べ、暴力で解決をはかることを否定している。この論証においても、クルアーンやハディースが用いられている。

このようにカードリーのファトワーは、社会に不正義があることを認めた上で、それに立ち向かうためには平和的手段を用いることがムスリムの義務であると説き、テロリズムという方法を否定している。これはすでに述べたように、彼自身の出身国を念頭に置いたものではあるだろうが、この世に不正があると認識する世界中の若者ムスリムたち全てに向けられたメッセージであり得るであろう。

3. イギリスのパキスタン系ムスリム

(1) 歴史的背景と現状：大英帝国の遺産

イギリスにパキスタンから移民がやってきた背景には英国がインドを植民地としていたことが存在する。移住とは、パキスタンのマジョリティ・ムスリムからイギリスのマイノリティ・ムスリムへの身分・生活様式の大きな変化であった。以下、その流れについて諸先行研究をもとに概観しておきたい（アンワル 2002; Ansari 2004; 山本・木村 2012）。

1947年に英領インドは分割して独立し、東西パキスタンが成立した。第二次大戦後の産業復興のため、イギリスの旧植民地からの安価な労働力が歓迎され、移住が奨励された。1948年のイギリスの国籍法によって、旧植民地の住民は「臣民」から「連邦（コモンウェルス）市民」として認められるようになっていく。1951年にはイギリス在住のパキスタン人（当時は同一国民であったパングラデシュ人を含む）は5000人ほどであったという。

1962年に連邦国移民法が制定され、海外植民地の住民は移民管理の対象となった。ただし、合法的に入国した連邦市民は選挙権を含め英市民と同等に権力行使できた（2011年時点）。この後、移民の数は減少していったが、1966年にイギリスに約12万人のパキスタン人が居住し、イギリス各地で出身国の文化を温存しつつパキスタン系移民の共同体が形成されていった。この時期以降、モスクも増え、イスラーム組織がいくつも創設されている。ただし出身国の伝統文化をそのまま継承しており、バーレルヴィー派やデーオバンド派といった南アジア系イスラームの勢力が強く見られた（Ansari 2004: 340-388）。MUQがイギリスで活動を始めたのは1981年、公式の事務所がイースト・ロンドンで開かれたのが1994年である⁽¹⁰⁾。

イギリス国内のムスリム共同体の存在が注目されたのは、すでにふれた1988年の『悪魔の詩』事件によってであった。インドのムスリム家庭出身の作家（本人は無神論者）であるサルマン・ラシュディがムハンマドなどをパロディー化した小説

『悪魔の詩』を出版し、これに対して英国内でパキスタン系移民による反発デモが起き、大騒動となったのである。さらにその翌年、イランの最高指導者ホメイニー師がラシュディに対して死刑宣告のファトワーを出したため、国際問題に発展した。これはイギリスの非ムスリム社会に、イスラモフォビア (Islamophobia, イスラーム嫌悪症) と呼ばれる社会現象を生じさせるに至った。この騒動でイギリス社会は、自国内にイスラームの価値観を根強く保ち続けるパキスタン系ムスリム共同体があることを明確に認識したのであった。これはイギリスがとってきた文化多元主義の結果でもあると言え、ムスリム共同体にはパキスタン系イスラームが根強く温存されたのである。

その後、移民政策は転換され、文化多元主義は英国文化への融和主義に変化していく。2000年にシティズンシップ教育が義務化され、2002年には国籍・移民及び庇護法が制定された。よって英国市民になるためには、イギリス人としての知識や認識を確認するテストを受けることが課せられたのである。このことはイギリスが文化多元主義から文化融和主義に方向を転換したことを意味し、移民系の人々にもイギリス市民としてのアイデンティティを確立させることが必要とされたのである。2000年にはモスクは1000以上となり、その翌年の国勢調査によれば、パキスタン系移民は約75万人で、インド系約100万人に次ぐエスニック・マイノリティになった（総人口は約5800万人）。現在パキスタン系ムスリム共同体はロンドン、バーミンガム、ブラッドフォード、マンチェスターなどの都市部に多く存在している。

サーデク・ハーミド Sadek Hamid は、現在のイギリス在住ムスリムのなかで見られるイスラーム思想・活動の潮流を次のように分類している。それらは、学問的伝統主義、サラフィー的古典主義、サラフィー的革新主義、政治的古典主義的サラフィズム、スーフィズム、「リベラル」または「理性主義的」革新主義、である⁽¹⁾。MUQ は最初の「学問的伝統主義」に属すとされる。この主義の特徴は、クルアーンとスンナ（ハディースで伝えられるムハンマドの範例）という宗教的知識の源

に厳格に従い、法学派の影響が強く、イジュティハードの余地はあまりない。イギリスではパーレルヴィー派とデーオバンド派の2つの学派があり、概してパーレルヴィー派の方が信仰行為や預言者を讃える集会への参加に熱心である。パーレルヴィー系諸組織は英国ムスリム・フォーラム (The British Muslim Forum) によって統括されているが、そのなかでも最も活動が活発なのが MUQ であるという (Hamid 2016 : 9-10)。

(2) テロという問題：イギリス的多文化主義のなかで

2001年のアメリカ同時多発テロ(9/9)以降、ヨーロッパでもアル=カーイダ系実行犯によるとされるテロが続いた。2004年のスペイン、マドリッドでの鉄道テロ、そして2005年のイギリス、ロンドンでの地下鉄・バス同時爆破事件、いわゆる7/7が起こった。当然ながら7/7が英国社会に与えた影響は大きかった。その衝撃は、実行犯がいわゆる「ホームグロウン・テロリスト」と呼ばれる、イギリス社会で育ったムスリムでパキスタン系移民の二世世代の者だったため、より深いものとなった。実行犯はアル=カーイダの作成した計画に沿って独自にテロを起こしたとも言われる。

これに対して、在英ムスリムの大半(8割とも)は反対を表明していたが、若者のなかからアル=カーイダのような過激イスラーム主義に共感を抱く者が出る土壌が英国ムスリム社会には存在したということは事実である。前述したようにイギリスの移民政策は元来、多文化主義を標榜し出身地の文化を温存するものであった。2010年の時点において、イギリスへの移民のなかで最大の集団はインド出身者、次いでポーランド、パキスタン、アイルランド、ドイツ、バングラデシュと続く(安達2013:30)。イギリスの多文化主義政策ゆえに、パキスタン出身のムスリムたちもロンドン以外にバーミンガムなどの地方都市に集住し、出身地の文化を温存して生活してきた。これは各移民文化の尊重であると同時に、英国文化からの隔離でもあり、この隔離性がムスリムたちにマイノリティ

としての疎外感・アイデンティティの危機という問題を引き起こしてきたことは多くの論者が指摘してきたことである（浜井 2004; 安達 2013; 佐久間 2007）。そして前述のように英国文化への融和と政策も進められてきたが、未だに出身地文化の温存やマイノリティの疎外の問題は解決されていない。

このことは、ISに参加を希望するムスリムの若者が後を絶たないことによく示され、大きな社会的・国際的問題となり、報道や議論も続いている⁽¹²⁾。こういった英国社会の状況ゆえに、カードリーの反テロ思想やそれに基づくカリキュラムが必要とされるのであろう。カリキュラム発表当日のロイターの報道は、これはISに魅かれ、シリアに行こうとする若者を止めるためのカリキュラムであるとしている。当時、キャメロン首相はムスリム共同体に対して、ムスリムのなかにはISのような過激思想を暗黙裡に認めている者がおり、それによって若者が過激化してしまうので、これを止めて欲しい、と呼びかけていた。これは17歳の若者がイラクに行って自爆攻撃し、また3人の姉妹が自分たちの9人の子どもたちを連れてシリアに行ったことをふまえての発言であった。実際に700人の英国人がシリアやイラクに行き、ISに加わったとみられる。ISのプロパガンダはインターネット経由で広まり、またカードリーのカリキュラムもインターネット経由で世界中で学べるようになりつつある。キャメロン内閣の元閣僚で、ムスリム初の入閣を果たしたサイイダ・ワルシー Sayeeda Warsi は、このカリキュラムが全ての学校で学ばれるよう政府は検討すべきであり、また英国ムスリムはISをはっきりと非難すべきだと述べている⁽¹³⁾。このようにイギリス社会は概して、カードリーのカリキュラムをムスリム内部からの改革の動きとして歓迎している。

4. 反テロ・カリキュラム

(1) 発足の経緯・目的

ファトワー発行後、カードリーは多くの国（アメリカ、カナダ、オーストラリア、トルコなど）

の大学や政府機関に招かれ、ファトワーに関する講演を行い、テロを抑え、平和を構築するためのアドバイスを求められるようになった（Habib 2014 : 312）。そしてカードリーの指導下で、ファトワー書を中心とする彼の思想に基づいた反テロ教育用のカリキュラム本の作成が進められ、2015年6月から7月にかけて、以下の3冊のカリキュラム教本が刊行された。1.『平和と反テロリズムに関する若者と学生のためのイスラームのカリキュラム *Islamic Curriculum on Peace and Counter-Terrorism for Young People and Students*』（以下『若者学生カリキュラム』）、2.『平和と反テロリズムに関する宗教指導者とイマーム（礼拝指導者）、教師のためのイスラームのカリキュラム *Islamic Curriculum on Peace and Counter-Terrorism for Clerics, Imams and Teachers*』（以下『指導者カリキュラム』）、3.『平和と反テロリズムに関するイスラームのカリキュラム（必須参考文献） *Islamic Curriculum on Peace and Counter-Terrorism (Essential Further Reading)*』（以下、『参考カリキュラム』）。

ファトワー本刊行直前の2009年8月にイギリスのウォーリック大学で3日間の若者向けキャンプ「アル=ヒダーヤ」（アラビア語で「導き」）が実施され、デンマークやカナダから1200名ものムスリムの若者たちが参加した。このキャンプは3日間行われたが、これはカリキュラム本で明示されている研修期間であり、カリキュラム教本の萌芽がここに見られるかもしれない。ここでカードリーはイスラームの特質として寛容、平和、融和、理解を主張し、非ムスリム市民を殺害した者は地獄に行く」と講演している。ロイターの報道は、2003年のイラク攻撃参加、特に2005年のロンドンでの7/7テロ以降、イギリスでもムスリムの過激行動が問題になっており、それに対抗する思想としてのスーフィズムが注目されているとし、スーフィー思想家であるカードリーのキャンプをこの文脈に位置づけて評価している⁽¹⁴⁾。

このアル=ヒダーヤ・キャンプは翌2010年8月にも同じ場所で開催されている。ボイス・オブ・アメリカの報道によれば、西洋世界初の若者ムス

リムに向けた反テロ・キャンプがイギリスで開催され、ヨーロッパや北米から 1300 人ほどが参加した。ターヒル・カードリーは今年、反テロリズムのためのファトワー書を刊行した。かつ今年はロンドンの 7/7 テロが起こって 5 年が経っており、カードリーは社会における統一こそが、このようなホームグロウン・テロリストを止める鍵だとしている、と報じている。そして記者は、参加者が過激派に立ち向かうための方法を学び、それぞれの国に戻って反テロのメッセージを広めてもらいたい、と期待を述べて締めくくっている⁽¹⁵⁾。

こういったキャンプでのカリキュラムを教本化したと考えられる 3 冊の反テロ・カリキュラム教本が 2015 年に刊行され、これに対しても多くの報道がなされた。出版を機に、BBC やロイター、フォックス、ワシントンポストをはじめ、アラブ、トルコ、インドそしてパキスタン、ロシアなどのメディアがターヒル・カードリーによる「反テロ・カリキュラム」の公表を報じた⁽¹⁶⁾。時節柄、特に IS の脅威に対抗するものとされ、各誌・各局はこのカリキュラムの意義を高く評価している。例えば BBC は「1 冊の本が過激主義を打ち負かすことができるか？」とのタイトルで、少なくとも 700 人の英国人がジハード組織に参加するために中東にわたり、英国でも過激派の影響が大きくなっているなか、ムスリムの若者たちの過激化を阻止するための新しいカリキュラムが出され、「このシラバスが、人々が海外に出る前に過激派のイデオロギーを認識するための必要なツールを提供するであろうと期待される」と報じている⁽¹⁷⁾。

ドイツ政府系のウェブサイトである Qantara.de は西洋とイスラーム世界の対話の促進を目指し、良質な記事を提供するものであるが、ここでも 2015 年 7 月にカードリーの反テロリズム・カリキュラムに関しての論考が出されている。ここでシュテファン・ヴァイドナー Stefan Weidner はこれが IS などに対抗するためのイスラーム神学に根差したカリキュラムであることを指摘するのみでなく、これまでも多くのムスリム学者がテロリズムを批判してきたが、カードリーの提供するカリキュラムのように体系立てられたものが出

され、それを世界的に広めようとする努力がなされることはなかったと、その独自性を評価している⁽¹⁸⁾。

(2) カリキュラムの特徴

すでに述べたように 3 冊のカリキュラム教本はカードリー自身でなく、その指導監督の下で学者たちのチームが編纂したものである。カードリーの著した『テロリズムと自爆攻撃に関するファトワー』を中心として、その他の著作、講演、講義に基づく。本格的なイスラーム学の教養や議論を基礎としており、それを現代の若者のためにできる限り分かりやすく伝えようとしている。

『若者学生カリキュラム』のコースは 1 日 8 時間で 3 日間続き、大学の学生や若者を対象とする。過激主義に立ち向かい、テロリズムに立ち向かうために法学的なトレーニングを提供し、かつこれに関係する参考文献を提示することを目的とする。なかでも、学生たちにイスラームの平和と安全を学ばせ、過激主義やテロリズムを客観的に認識させる機会を与えようとしている。そのためには、平和概念やジハード概念などをムスリム学者たちの理論をもとに学ぶとともに、自らの心のかから絶望をなくし、異なる信仰をもつ者との調和を重んじ、慈悲の心を持ち、人類に貢献することが目指されている (Tahir-ul-Qadri 2015a : 3)。

全体の流れはカードリーのファトワー本に概ね対応している。トピックごとに、クルアーン、タフスィール、二大『サヒーフ』などの六大ハディース集、四大法学者、学者などの著作に加え、カードリーの著作や講演などが参考資料として列挙されている。ただファトワー書の第 18 章 (最終章) に対応する「ムスリム国における真理の展開の平和的方法」に関する内容は、この学生向けカリキュラム書にはなく、ハワーリジュ派への批判で終わっている。この内容は教師向けカリキュラムには含まれており、本カリキュラムの主目的は学生にハワーリジュ派に入らせないことなのであろう。

これに対して『指導者カリキュラム』も 1 日 8 時間で 3 日間続くが、対象は宗教指導者、説教者、

学者、イスラーム学の教師たちである。その目的は、履修者に学問的に観念的なトレーニングと反テロリズムに関する原典資料を学ぶ機会を提供することである。特に共同体の宗教指導者として、モスクを異なる信仰どうしの調和のために用い、金曜礼拝の説教などでイスラームが平和を説いていることを語るためのトレーニングが提供される。またイスラームの枠内だけでなく、国家システムや民主主義について学び、世界のなかでムスリムとして調和して生きていくことの重要性を学び、西洋世界への敵対心をなくす必要があることが教えられる (Tahir-ul-Qadri 2015b : 3-4)。

各セクションはカードリーのファトワー本に概ね対応している。受講者用のものとは順序や内容が全く同じではないが、重なる個所も少なくないが、抽象的説明がより多い。ファトワー本の第18章にあたる「ムスリム国における真理の展開の平和的方法」が含まれている点はすでに述べた通りである。この後さらに「現代における宗教者やイマーム、教師の責任」と「熟考と改革のための呼びかけ」という章が続き、履修生が宗教指導者であるため、その立場についての認識が論じられている。

さらにこちらでもトピックごとに参考文献として文献の関連個所が列挙される。クルアーン、タフスィール、二大『サヒーフ』といった六大ハディース集、四大法学者、学者などの著作に加え、カードリーの著作や講演などである。項目によっては、ハディースが直接引用され、簡単な説明があり、また、カードリーの文献のみの場合もある。『若者学生カリキュラム』と『指導者カリキュラム』を比べると、受講者用には叙述・解説が中心、指導者用にはレファレンス情報が中心となっている。

3冊目の『参考カリキュラム』(Tahir-ul-Qadri 2015c)はさらに参照すべき原典のリストのようなものとなっている。7つの部からなり、各タイトルはカードリーが著してきた著作そのものである。つまり彼がこれまで論じてきた事柄全体がファトワー本の理解のために有用だということであろう。7つの部は以下のとおりで、イスラーム

が愛と平和を説き、それはムハンマドという人物によって体现されていることが示されている。第1部「ムスリムと非ムスリムの関係」、第2部「愛と非暴力にあるイスラーム」、第3部「人類に奉仕するイスラーム」、第4部「慈悲と慈愛にあるイスラーム」、第5部「偉大なるジハード」、第6部「ムハンマド 慈悲者」、第7部「ムハンマド 平和構築者」となっている。

各部において、必須文献としてカードリーの著作が、また教師と学生への追加文献として様々な文献の関連個所が列挙されている。後者で挙げられている文献はクルアーン、タフスィール、六大ハディース集、四大法学者や著名な学者による著作である。

これら3冊のカリキュラム教本の特色は古典期のイスラーム学文献を多く引用していることである。つまり本格的なイスラーム学に基づくプログラムであり、指導者は当然ながら、学生もイスラーム学の素養がある程度は必要だと考えられる。カードリー自身、一夜では過激思想の持主は変わらないかもしれないが、知性が最終的には過激主義を打ち負かすと信じ、次のように述べている。

我々は、精神的に、学問的に、知的に、そして宗教的に、過激派的傾向や急進的なテロリストの態度に彼ら[若者ムスリム]が対応できるようにしてやる必要がある。彼らに、真のイスラーム像を知らしめなければならないのである⁽¹⁹⁾。

彼のカリキュラムは、この「知性」を作り出すためのものだというのであろう。それはアジェンダのための短文によって短絡的にテロ組織に魅かれる若者たちに対し、長い時間をかけて形成されたイスラーム学の体系を原典から学ばせ、平和思想を体得させる作業だと言えるだろう。

おわりに

ターヒル・カードリーのファトワー書は、テロによる不安定さが続くパキスタン社会を念頭に生まれ、英訳されることでグローバルな展開を見せ

た。刊行された 2010 年頃の国際社会の懸念はアル＝カーイダを代表的存在とするムスリムのテロ活動組織であった。カードリーのファトワーは、好戦的とみなされがちなムスリム共同体内部から暴力的行為を完全に否定する学者の法学判断として、非ムスリム社会からも歓迎された。本稿では、マイノリティ・ムスリムによるテロ行為・暴力行為に悩んでいたイギリス社会に着目して論じた。イギリスでは 2015 年にはこのファトワー書に基づいた教育カリキュラム教本 3 冊が英語で刊行され、実際に教育プログラムが始動した。これもまたイギリスなど非ムスリム社会から歓迎されたのであった。

カードリーのファトワーはムスリム・マジョリティ社会で生まれ、カリキュラムはそれを元にムスリム・マイノリティ社会に移行されたものである。これら 2 つの社会は大きく異なり、それぞれに暮らすムスリムたちの環境も違ったものとなるが、この移行にはどのような意味があるのだろうか？

そこでまず、ファトワー書とカリキュラム教本の違いについて考えてみたい。すでに論じたように、違いはほとんどないと言える。カリキュラム教本はファトワー書以外のカードリーの文献を用いている分、ふくらみはある。だがむしろ、そもそも学問的議論が展開されており、変化の余地は少ないと言える。これは知性をムスリムの若者たちのなかにつくりたいというカードリーの最終目的に合致している。この目的のために、クルアーンやハディースに加え、古典期や現代の学者たちの言説を網羅的に紹介し、論じているのであるから、どのような国・社会に居住しようとも、ムスリムとして学ぶべきことは変わらないのである。

ただし、ファトワー書の第 18 章にあたる内容が、『若者学生カリキュラム』には含まれていないことはすでに指摘した通りである。ファトワー書の第 18 章はまず、クルアーンやハディースから、ムスリムが善を行い、悪を禁じる必要があることを説く。次いで、不正で抑圧的な支配者に対しては、平和的・民主的に立ち向かうべきだと主張する。その具体的手法としては、書籍や他のメディ

アでその悪事を暴く、非暴力的デモを行って反意を表示する、コンファレンスやワークショップを開く、講演を行う、といったことが挙げられている。これらを通して、人々の意識を高め、人権を尊重し、抑圧や暴力を排除することを目指すのであるが、これはまさにカードリーや MUQ が実践していることである。

この議論に続いて、非ムスリム国におけるムスリムの生き方も言及される。ここでは、非ムスリム国に難民や留学正、永住者といったいずれの立場で居住していても、必ずそのホスト社会の義務や法を順守しなければならないとしている。これはマイノリティ・ムスリムによるホスト社会へのテロ行為や反社会的行為を厳しく否定する重要な指摘である (Tahir-ul-Qadri 2010 : 409-410)。

このような政府との関わりについての内容が『若者学生カリキュラム』になく、『指導者カリキュラム』のみに含まれているのはなぜだろうか。本論でも言及したが、受講者にはこの第 18 章に至るまでに論じられている、テロ組織に入らない意味を説くことが最重要課題と考えられているからであろう。これは、ファトワー書の最終目的である若者に知性、つまりイスラームに関する真の理解をつくりだすことに合致している。社会における実践は知性をまず獲得してから、ということであろう。

そして知性をつくり出すカリキュラムとして、ファトワー書がパキスタンというムスリム・マジョリティ国からの内発的メッセージであることは、若者ムスリムへの説得力を増す要因だと考えられる。この反テロ・メッセージはイスラーム国で高い支持を得ているイスラーム学に習熟した学者ターヒル・カードリーによる。それは、マイノリティ・ムスリムが居住するホスト社会の非ムスリムによるテロ対策とは決定的に異なる意味合いをもつ。若者たちは自分がムスリムであることを深く認めながら、イスラーム世界の学者によって真のイスラームを学び、知性を獲得する。ここでイスラームの本質を掘り起こし、ジハード主義者のイスラーム理解が誤っていることをイスラームの根本から説かれることで、若者の意識が変革す

ることが期待されるのである。これこそが、カードリーのファトワー書が、国境を超えて展開されてカリキュラムとなった意義だと考えられる。

以上をふまえた今後の研究課題であるが、MUQの反テロ・カリキュラムの実地調査を行う必要があると考えている。イギリスとパキスタンのMUQを訪問し、授業などの見学、受講者や教師へのインタビューなどを行いたい。これからファトワーがどのように現実社会に影響力をもっているのかを分析する。

またカードリーのファトワーやその他の文献についての精査も進めていきたい。特にクルアーン解釈としてカードリーの思想を検討することを考えている。クルアーンの文言をもとに、テロ活動を正当化させる者もいれば、平和を説く者もいる。この解釈の幅の広さの問題を念頭に、カードリーのクルアーン理解と現代のテロ実行者の理解を比較し、平和的解釈に統合する可能性の是非を検討したい。

さらには他の平和思想を説くムスリム国際NGOとの比較検討も必要であろう。特にフェトフラー・ギュレンのヒズメット運動（ギュレン運動）との比較を考えている。この運動について筆者はすでに論じており（大川 2013; 2014）、カードリーやMUQとの共通性が多いことから、両者の比較検討に意味があると考えている。その共通性とは、創設者にスーフイズムの影響が強く、平和や愛、宗教間対話を説くこと、祖国の政府と対立関係にあること、祖国の外に拠点をもち、国際的にNGOを展開していること、などである。そして最終的には、イスラームの平和思想とその世界的実践の全体像のなかでカードリーの思想や行動を位置づけできればと考えている。

注

- (1) 「ミンハジュ・ウル＝クルアーン」とは「クルアーン（コーラン）の方法」といった意味である。また「ミンハジュ・ウル＝クルアーン・インターナショナル」という国際名称からMQIと略記されることもあるが、本稿ではMUQで統一する。
- (2) 例えば、ダボス会議（世界経済フォーラム、World Economic Forum）で2011年にテロリズムに関するパネル・セッションで講演している。
<http://minhaj.org/english/tid/13214/Dr-Muhammad-Tahir-ul-Qadri-Davos-Annual-Meeting-2011-World-Economic-Forum-Reality-eliminate-terrorism-religion-politics-Pakistan.html>（2016年7月13日アクセス）。
- (3) ただし日本にもMUQの支部が存在する。
<http://minhaj.org/english/Country/MQI/Japan/>（2016年8月9日アクセス）を参照のこと。
- (4) 彼の半生はファトワー本やカリキュラム本などの巻頭に簡略にまとめられたものが掲載されている（Tahir-ul-Qadri 2010: II-III; Tahir-ul-Qadri 2015a: IX-XI; Tahir-ul-Qadri 2015b: IX-XI; Tahir-ul-Qadri 2015c: IX-XI）。これらはほぼ同じ内容であるが、カリキュラム本には2010年のファトワー本刊行以降の情報が加えられている。さらに詳細なものとして、“Shaykh-ul-Islam Dr Muhammad Tahir-ul-Qadri: A Profile”（本稿では著者不明のため“Profile”と表記）がある（http://www.minhaj.org/downloads/Shaykh_ul_islam_profile_2012.pdf, 2016年2月10日アクセス）。またハビブもターヒル・カードリーの半生について詳細に論じている（Habib 2014: 21-34）。
- (5) 移民政策研究所（Migration Policy Institute）によれば、2015年には、パキスタン出身の移民がイギリスで540,000人と最も多く、次いでイタリアで85,000人、スペインで56,000人となっており、イギリスの移民人口の多さが傑出している（<http://www.migrationpolicy.org/programs/data-hub/charts/international-migrant-population-country-origin-and-destination>, 2016年7月8日アクセス）。
- (6) トリビューン紙の記事（<http://tribune.com.pk/story/483635/save-the-state-not-politics-qadri-returns-in-style/>, 2016年7月13日アクセス）や、BBCの報道（<http://www.bbc.com/news/world-asia-21039065>, 2016年7月13日アクセス）を参照のこと。
- (7) 本稿執筆時点（2016年8月）において、エルドアン大統領率いるトルコ政府とヒズメット運動の関係は極めて険悪な状況にある。国内のギュレン系組織やメンバーは弾圧を受け、大統領は2016年7月の軍事クーデター未遂の背後に米国在住のギュレンがいると主張し、その身柄拘束を要求している。
- (8) 「ラシュディ事件」については、例えば浜井（2004: 168-225）を参照のこと。
- (9) <http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk/8544531.stm>.（2016年3月3日アクセス）。
- (10) <http://minhajuk.org/minhajuk/index.php/About-Us/>（2016年7月14日アクセス）。
- (11) 「サラフィー的原典主義」はイスラーム初期の世代（サラフ）への回帰を目指し、クルアーンやスンナに従い、「サラフィー的改革主義」は原典の解釈を積極的に行う。「政治的原典主義的サラフィズム」は暴力

- で物事を解決しようとする過激主義で、これがテロリズムと結びつくと考えられる。「スーフイズム」は神秘主義教団(タリーカ)を形成し、『リベラル』または『理性主義的』改革主義』は世俗的な傾向の強い集団である (Hamid 2016 : 9-12)。
- (12) 例えば、イギリスの若者が、ISのことをビートルズやワン・ダイレクションといった人気ポップ・アイドル・グループのように思っ て魅かれ、移住を決意していることが指摘されている。
<http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/islamic-state/11517981/Isil-are-like-Beatles-and-British-youngsters-want-to-be-them-warns-prosecutor.html> (2015年3月16日アクセス)。
- (13) <https://ca.news.yahoo.com/pakistani-cleric-launches-anti-isis-curriculum-britain-144733155.html> (2016年3月16日アクセス)。
- (14) <http://uk.reuters.com/article/us-britain-islam-camp-idUKTRE5792AL20090810> (2016年4月2日アクセス)。詳しくは、<http://www.minhaj.org/english/tid/8790/Al-Hidayah-Youth-Camp-2009.html> も参照のこと。
- (15) <http://www.voanews.com/content/anti-terrorism-summer-camp-held-in-britain-100649109/170175.html> (2016年3月3日アクセス)。
- (16) MUQのウェブサイト (<http://www.minhaj.org/english/Peace-Curriculum/>), 2016年3月24日アクセス) で報道一覧を得ることができる。
- (17) <http://www.bbc.com/news/uk-33235583> (2016年3月24日アクセス)。
- (18) <https://en.qantara.de/content/curriculum-initiative-by-british-muslims-using-religion-to-fight-terrorism> (2016年3月24日アクセス)。
- (19) <http://www.reuters.com/article/us-britain-islam-camp-idUSTRE5792AL20090810> (2016年7月15日アクセス)。
- Britain, London: Bloomsbury [Kindle 版].
- Guidugli, Mattias. 2013. "Muhammad Tahir ul-Qadiri, *Fatwa on Terrorism and Suicide Bombings*, London: Minhaj-ul-Quran International, 2010" [Book Review], *Politics, Religion & Ideology* 14/1: 159-161.
- Habib, Muhammad Rafiq. 2014. *Islamic Revivalism: Necessity & Challenge: A Critical Analysis of Dr Muhammad Tahir-ul-Qadri's Ideology*, Saarbrücken, Germany: Scholars' Press.
- Morgahi, M. Amer. 2011. "An Emerging European Islam: The Case of the Minhajul Qur'an in the Netherlands," in Martin van Bruinessen and Stefano Allevi eds., *Producing Islamic Knowledge: Transmission and Dissemination in Western Europe* (London: Routledge): 47-64.
- Morgahi, Amer. 2013. "Reliving the 'Classical Islam': Emergence and Working of the Minhajul Quran Movement in the UK," in Ron Geaves and Theodore Gabriel eds., *Sufism in Britain* (London: Bloomsbury): 213-234 [Kindle 版].
- Philippou, Alix. 2013. "When Sufi Tradition Reinvents Islamic Modernity: The Minhaj-ul Qur'ān, a Neo-Sufi Order in Pakistan," in Clinton Bennet and Charles M. Ramsey eds., *South Asian Sufis: Devotion, Deviation, and Destiny* (London and New York: Bloomsbury): 111-122.
- Tahir-ul-Qadri, Muhammad 2010. *Fatwa on Terrorism and Suicide Bombings*, London: Minhaj-ul-Quran International.
- . 2015a. *Islamic Curriculum on Peace and Counter-Terrorism for Young People and Students*, London: Minhaj-ul-Quran Publications.
- . 2015b. *Islamic Curriculum on Peace and Counter-Terrorism for Clerics, Imams and Teachers*, London: Minhaj-ul-Quran Publications.
- . 2015c. *Islamic Curriculum on Peace and Counter-Terrorism (Essential Further Reading)*, London: Minhaj-ul-Quran Publications.
- Weimann, Gabriel. 2011. "Cyber Fatwa and Terrorism," *Studies in Conflict and Terrorism* 34/1: 765-781.

参考文献

- Ahmad, Mumtaz. 2010. "Media-Based Preachers and the Creation of New Muslim Publics in Pakistan," in Mumtaz Ahmad, Dietrich Reetz and Thomas H. Johnson, "Who speaks for Islam?: Muslim Grassroots Leaders and Popular Preachers in South Asia" (*The National Bureau of Asian Research Report* #22, February 2010): 1-27.
- Ansari, Humayun. 2004. *The Infidel Within: Muslims in Britain since 1800*, London: Hurst.
- Cairo, Alexandre. 2011. "Transnational Ulama, European Fatwas, and Islamic Authority: A Case Study of the European Council for Fatwa and Research," in Martin van Bruinessen and Stefano Allevi eds., *Producing Islamic Knowledge: Transmission and Dissemination in Western Europe* (London: Routledge): 121-141.
- Geaves, Ron and Gabriel, Theodore, eds. 2013. *Sufism in Britain*, London: Bloomsbury [Kindle 版].
- 安達智史 2013. 『リベラル・ナショナリズムと多文化主義 イギリスの社会統合とムスリム』 勁草書房。
- アンワル, ムハンマド (佐久間孝正訳) 2002. 『イギリスの中のパキスタン 隔離化された生活の現実』 明石書店。
- 井上ありか 2003. 「パキスタン政治におけるイスラーム」 『アジア研究』 49 : 5-18。
- 大川玲子 2007. 「イスラーム教徒の聖典観 現代の若者たちにとっての『クルアーン (コーラン)』」 『国際学研究』 31 (2007) : 33-54。
- 2013. 『イスラーム化する世界 グローバリゼーション時代の宗教』 平凡社新書。
- 2014. 「平和と戦争をめぐる二人のイスラーム教徒 — オサマ・ビン・ラディンとフェトフラー・ギョレン」 『PRIME』 37 : 11-20。
- 国末憲人 2005. 『自爆テロリストの正体』 新潮新書。

ムスリムによる反テロ思想と英国における教育実践

- 小杉泰 1987。「現代イスラームにおける宗教勢力と政治的対立」, 片倉もとこ編『人々のイスラーム その学際的研究』日本放送出版協会: 27-86。
- 坂口賀朗編 2010。「パキスタンのテロとの闘い」『東アジア戦略概観』(防衛省防衛研究所): 35-60。
- 佐久間孝正 2007。『移民大国イギリスの実験 学校と地域にみる多文化の現実』勁草書房。
- 中野勝一 2014。『パキスタン政治史 民主国家への苦難の道』明石書店。
- 浜井祐三子 2004。『イギリスにおけるマイノリティの表象 「人種」・多文化主義とメディア』三元社
- 別府正一郎・小山大祐 2015。『ルボ 過激派組織 IS (Islamic State) ジハーディストを追う』NHK 出版。
- 水谷章 2011。『苦悩するパキスタン』花伝社。
- 三井美奈子 2016。『イスラム化するヨーロッパ』新潮新書。
- 嶺崎寛子 2015。『イスラーム復興とジェンダー 現代エジプト社会を生きる女性たち』昭和堂。
- 山内昌之 2016。『中東複合危機から第三次世界大戦へ イスラームの悲劇』PHP 新書。
- 山本須美子・木村葉子 2012。「イギリスにおける移民・マイノリティとシティズンシップ Introduction」, 石川真作・渋谷努・山本須美子編『周辺から照射する EU 社会 移民・マイノリティとシティズンシップの人類学』(世界思想社): 178-192。